『オーロラ・フロイド』とモダニティ
――オーロラと彼女の秘密――

松　本　三枝子

序

Mary Elizabeth Braddon は *Lady Audley's Secret*（1862）に続き、*Aurora Floyd*（1863）を出版して、sensation novel（煽情小説）の人気小説家として 'Queen of the Circulating Libraries' の地位を築いていくことになった（Tromp, *Rod* 17）。Wilkie Collins や Ellen Wood と並び、煽情小説家としてのブラッドンの破格の成功は、同時代の文学者、小説家、編集者等を不安にさせたが、それは間違いなく新しい時代の到来を意味するものであった。つまり、大衆文学の誕生である。*North British Review* で W. Fraser Rae が 'making the literature of the Kitchen the favourite reading of the Drawing room' (Rae 592) と表現したように、煽情小説の内容は、お世辞にも上品とは言い兼ねる物語に充ちていた。bigamy novel あるいは newspaper novel と揶揄された煽情小説が得意としたのは、重婚、不義密通、殺人、放火、脅迫等の新聞紙上を賑わすような事件が、それらとは無縁であるべき中産階級の家庭の中で起きる物語であった。このような煽情小説の人気は当時の人々に驚異を与えるほどのものであり、多くの批評家や小説家がこの状況を看過できずに、こぞって言及している。

保守派の論客であった Margaret Oliphant は、イギリス小説をイギリス詩やイギリス演劇に比肩する、国民精神を育成する文学ジャンルとして高く評価していた。そのような彼女にとり煽情小説はまるでフランス小説を模倣したものであり、女性読者の欲望を喚起するような大衆小説は黙認すべきものではなかった。煽情小説に対するオリファントの次のような批判は、彼女の保守的な文学観を表現するものでもあるが、同時に小説家としての彼女の危機感を語るもの

でもある。

> In the little reflected worlds of the novel and the drama the stimulant has acted strongly, and the result in both has been a significant and remarkable quickening of public interest…. But it is a fact that the well-known old stories of readers sitting up all night over a novel had begun to grow faint in the public recollection. Domestic histories, however virtuous and charming, do not often attain that result—nor, indeed, would an occurrence so irregular and destructive of all domestic proprieties be at all a fitting homage to the virtuous chronicles which have lately furnished the larger part of our light literature. Now a new fashion has been set to English novel-writers. (Oliphant, 'Sensation' 565)

このような同時代の煽情小説への批判の中で、Henry James が *The Nation* に掲載した論評、'Miss Braddon' は少し趣きが異なっている。弱冠22歳であったジェイムズであるが、ブラッドンは才気があり、『オーロラ・フロイド』は勇気という特質があるとしている（James 593）。彼はブラッドンやコリンズの読者である大衆を冷静に捉えており、彼らは George Eliot、George Sand、William Makepeace Thackeray を読まない人々であるとしている。数頁の短評であるが、コリンズとブラッドンの関係を、Samuel Richardson と Jane Austen になぞらえて、家庭の平和はオースティンから、家庭ミステリーはブラッドンから始まったとし、イギリス小説の歴史の中でのブラッドンの位置を的確に位置づけている。ジェイムズの批評で興味深いのは、ブラッドンが女性であれば通常は知らない競馬や賭博に通じており、読者がそれを楽しんでいると指摘していることである（James 598）。

つまり、小説のヒロインもその作家もともに、同時代の女らしさの規範からは逸脱していることが推察できる。しかしながら、ブラッドンは「貸本屋の女王」と呼ばれ、彼女の小説は性の規範に厳しい Mudie's の検閲を通過し人気リストにあがり貸本屋に常備されていた（Terry 11）。当然そこにはブラッドンの読者の嗜好への配慮とミューディーズへの戦略とがあったはずである。本論で

は、彼女の小説『オーロラ・フロイド』のヒロインであるオーロラ・フロイドの造形を分析することで、ブラッドンの戦略とこの小説のモダニティに迫りたい。

I　鞭を振るう女

ブラッドンの煽情小説の多くは、劇化されて上演され好評を博している(Wolff 142)。それはかつて女優であったブラッドンの経験も活用されているが、何よりも彼女の小説に描かれる場面が、衝撃的でかつ視覚的であることが影響している。19世紀に人気をよんだ多くの小説には挿絵が入っているが、『オーロラ・フロイド』の Tinsley Brothers 版にも挿絵が入っている。それはヒロインのオーロラが下男に鞭を振るう次のような場面である。

> She [Aurora] disengaged her right hand from his collar and rained a shower of blows upon his clumsy shoulders with her slender whip; a mere toy, with emeralds set in its golden head, but stinging like a rod of flexible steel in that little hand.
>
> 'How dare you!' she repeated again and again, her cheeks changing from white to scarlet in the effort to hold the man with one hand. Her tangled hair had fallen to her waist by this time, and the whip was broken in half-a-dozen places. (*Floyd* 138)

この女性が労働者階級の出身で、貧しい廃屋に住んでいるならともかく、裕福な銀行家の娘であり、新婚間もない Mellish Park の女主人となったオーロラが下男を鞭打つ場面は、衝撃的であるのみならず読者の記憶に焼き付く場面となっている。この時代の労働者階級の家庭では、酒に酔った夫や父親が、妻や娘に暴力を振るう家庭内暴力は当然あった。しかしながら、オーロラのような豊かな中産階級の女主が下男に暴力を振るうことは、ヴィクトリア朝の女らしさの規範からも明らかに逸脱している。下男が自分の犬を足蹴にしたと怒るオーロラに、夫の John Mellish がなぜ自分に言わないのかと驚き注意している

ことからも、彼女の行為の異常さが見て取れる。下男の Steeve Hargraves は即刻解雇され屋敷から立ち退くことになり、オーロラへの復讐を誓うことになる。この事件はその後の物語で伏線となっていく重要な事件であるのだが、オーロラのキャラクターを浮き彫りにする事件ともなっている。

オーロラは 6 歳で人形を拒否しておもちゃの馬を欲しがり、11歳で馬を語り、12歳でダービーに半クラウンを賭けて勝っている（*Floyd* 21）。彼女の愛読紙は、*Bell's Life* という競馬新聞である。中産階級の女性達が、*English-woman's Domestic Magazine* のような女性誌や家政読本を読むことで domestic femininity を涵養していた時代に、オーロラの愛読書は競馬新聞であった。このようなオーロラの性格は、生まれて間もなく母親を亡くしたことと父親の溺愛とが原因と考えられる。自由気侭に馬を乗り回し、競馬に熱中するオーロラであるが、その容姿は極めて美しく、黒髪と黒い瞳、美しい白い歯で一目で男達を虜にしていく。

オーロ–ラのこのようなキャラクターは、彼女の従妹の Lucy Floyd と比較すると際立つ仕掛けとなっている。High Church Novel に熱中する金髪碧眼のルーシーは、正にこの時代の女らしさの理想に従った造形となっている。

> She [Lucy] was direfully afraid of her cousin's ponies and Newfoundland dogs, and had a firm conviction that sudden death held his throne within a certain radius of a horse's heels; but she loved and admired Aurora, after the manner common to these weaker natures, and accepted Miss Floyd's superb patronage and protection as a thing of course. (*Floyd* 21, emphasis added)

ルーシーはオーロラの 'superb patronage and protection' を弱者として従順に受け入れている。ルーシーの従順さはこの時代の女性に求められた家庭性と道徳観を反映したものであり、彼女が適切に母親により教育されたことを物語っている。それと対照的なのがオーロラの態度であるが、それは彼女が銀行家の跡継ぎ娘、'heiress'（*Floyd* 20）として屋敷の内外で、誰にも管理されていないこと、つまり権力を握っていることを示している。もちろん彼女の権力の後ろ

盾は父親の資産であるのだが、彼は娘への溺愛ゆえにその力を全く発揮できずにいたのである。

オーロラの自由の権利主張は、従順なルーシーに対してのみならず、後に求婚者ともなる Talbot Bulstrode に対しても同様である。

> ‘What is the use of this big world, if we are to stop for ever in one place, chained to one set of ideas, fettered to one narrow circle of people, seeing and hearing of the persons we hate for ever and ever, and unable to get away from the odious sound of their names? I [Aurora] should like to turn female missionary, and go to the centre of Africa with Dr Livingstone and his family; and I would go if it wasn’t for papa.’ (*Floyd* 52–53)

タルボットは自己顕示欲の強いオーロラと従順なルーシーの間で戸惑いながらも、結局はオーロラの美貌に屈して求婚するが、断られる。その時の彼女の姿を彼は次のように表現している。

> She [Aurora] was wrapped in an opera cloak; no stiff, embroidered, young-ladyfied garment; but a voluminous drapery of soft scarlet woollen stuff, such as Semiramide herself might have worn. ‘She looks like Semiramide,’ Talbot thought. ‘How did this Scotch banker and his Lancashire wife come to have an Assyrian for their daughter?’ (*Floyd* 67)

准男爵であり、バルストロード城の跡継ぎであるタルボットの求婚相手としては、明らかにルーシーが適任であろうが、彼は異国の女王であるセミーラミス、美貌と叡智と好色のアッシリアの女王を想起させるオーロラに求婚して、拒否されることになる。タルボットとオーロラの会話は愛を交わすというよりは、まるで覇権を争う権力闘争の場面を想起させる。暴れ馬を乗りこなそうとするのだが、結局それを諦めるというのがタルボットである。

しかしながら、再度求婚されてオーロラはタルボットを受け入れるが、彼は

母親から、オーロラの過去に謎があることを知らされる。Lyn Pykett は煽情小説のヒロインの共通する特徴は「秘密を持つ女」(Pykett 84) であると分析している。同じブラッドンの書いた *Lady Audley's Secret* は正にタイトルにそれが表現されているが、オーロラにも同様の秘密がありそれが物語の展開の動力ともなっている。ただし、P. D. Edwards のようにそれは秘密ではなくむしろ謎であって登場人物も読者もともにオーロラの謎めいた力と情熱の根源に迫っていくことを楽しんでいるという分析もある（Edwards x–xi）。オーロラがタルボットの最初の求婚を退けた理由、そしてタルボットが結局オーロラの元を去ることを決意した理由は、パリの女学校からオーロラが出奔したことであるのは確かである。エドワーズが指摘するように、この出奔は秘密ではなく物語冒頭から明らかとまでいえるのかは疑問が残る。

少なくとも、オーロラの出奔の相手が馬丁の James Conyers であったとわかるのは、物語半ばである。むしろ一貫して明らかなのは、オーロラの性的な魅力と、彼女自身の抑制されない性欲である。同時代の Margaret Oliphant は正にその点を批判しているのだが、『オーロラ・フロイド』においては、あくまでもそれは彼女の魅力として造形されている。特にオーロラの魅力がルーシーの従順で退屈な女らしさと比較された時に一層際立ち、物語内の男性登場人物であるタルボットや、メリッシュのみならず読者もオーロラの魅力に共感するように語られている。それは語り手、あるいはその背後にいる作家のブラッドンがオーロラの性的な魅力を決して否定的には捉えていないことを示している。

結局オーロラが過去の秘密を明かさなかったために、彼女の元を去るタルボットとは対照的に、ジョン・メリッシュは最初からこの秘密に迫ろうとはしない。つまり彼女と覇権を争おうとはしないのが、メリッシュである。彼は彼女の性的な魅力に屈した男であり、彼女は運命の女であり彼はその奴隷である。

つまり、オーロラは同時代の性のダブルスタンダードからも、伝統的な女らしさの規範からも逸脱しているが、メリッシュとの夫婦関係では、明らかに優位に立ち、覇権を握っている。そのような彼女の力を象徴する場面として、前述した下男を鞭打つ場面が展開するのである。オーロラが鞭を打っているの

は、確かに下男であるが、彼女が覇権を行使しているのは、夫に対してであり、メリッシュ・パークにおいてであり、彼女の人生においてである。このようにオーロラの造形は19世紀中期の小説のヒロイン像としては異端のものであるが、否定的には描かれていない点が重要である。次章では、彼女の自己決定権、自立性についてさらに分析を進めたい。

II　主体を持つ女

オーロラが前章で分析したように、自らの美貌と性的魅力を武器に、権力を握り覇権を行使することができる女性であったことを確認した上で、彼女の人生における度重なる危機的な場面を、彼女がどのように克服していったのかを検証していきたい。マーリーン・トロンプは、『オーロラ・フロイド』の出版が、正に Contagious Diseases Acts が国会で議論されている時期と重なっていることを指摘し、この小説が「危険な女」の造形に貢献することになっていると分析している（Tromp, *Rod* 106–107）。トロンプによれば、オーロラと親しくなった男達は彼女に対して恐怖を感じるようになっていき、オーロラの力と彼女の大型犬 Bow-wow とのイメジが融合している（Tromp, *Rod* 114）。例えば、ルーシーはオーロラが愛するポニーや猟犬、大型犬等に恐怖を感じながら、彼女の力に従属する。同世代の女性でありながらも、経験豊かな女となっているオーロラと、全くの乙女であるルーシーとが対照的であるのは、前章で分析した。ここで指摘したいのは、この 2 人の関係においては、オーロラは男性的であり、保護者的であり、さらにいえば家父長的に振る舞っていることである。それでは、この小説に登場する男性達、タルボット、メリッシュ、彼女の最初の夫であったジェイムズ・コニャーズに対してはどうであろうか。

最初は、求婚を受け入れた後に、オーロラが見知らぬ男と言葉を交わし、金を渡すところに遭遇した婚約者のタルボットが、男の素性を尋ねる場面である。実はこの畜犬商の Matthew Harrison は、オーロラの過去を知る男であるので、彼女はタルボットに詳しいことを話そうとはしない。過去の秘密を婚約者のタルボットには知られたくないオーロラであるが、この時のオーロラとタルボットはマリー・アントワネットと彼女を追求する下層階級の人々に喩えられ

ている‘as if she had been Marie Antoinette going to face her plebeian accusers’ (*Floyd* 86)。前章でも指摘したが、この場面でも作者はオーロラを非難せず、むしろ支援している。自分の婚約者として不適切な行為をするオーロラを諌め、彼女に男との関係を明らかにするように求めるタルボットに対して、彼女は次のように自らの権利を主張する。

> ‘This cross-questioning is scarcely pleasant, Captain Bulstrode. If I choose to give a five-pound note to any person who may ask me for it, I expect full license to do so; and I will not submit to be called to account for my actions—even by you.’
> ‘Aurora!’
> The tenderly reproachful tone struck her to the heart.
> ‘You may believe, Talbot,’ she said,—‘you must surely believe that I know too well the value of your love to imperil it by word or deed—you *must* believe this.’ (*Floyd* 88)

32歳のタルボットと19歳になったばかりのオーロラであるが、婚約を結んだ後にも、彼女は自らの行動の自由と自己決定権を主張して譲らない。そしてついに、パリの女学校時代に彼女が学校から出奔したことを知ったタルボットが、その理由を再び尋ねることになる。

> ‘… why did you run away from the Rue St Dominique?’
> ‘I cannot tell you.’
> ‘And where were you between the month of June in the year fifty-six and last September?’
> ‘I cannot tell you, Talbot Bulstrode. This is my secret, which I cannot tell you.’
> ‘You cannot tell me! There is upwards of a year missing from your life; and you cannot tell me, your betrothed husband, what you did with that year?’
> ‘I cannot.’
> ‘Then, Aurora Floyd, you can never be my wife.’ (*Floyd* 103–104)

Barbara Leigh Bodichon が世界で最も差別的に扱われていると非難したイギリス既婚女性の地位を象徴する coverture の時代、つまり既婚女性は夫と一心同体となるゆえに独立した権利を主張できない時代であった。その時代背景を考慮する時、オーロラの主張がいかに大胆なものであるか、タルボットの主張がこの時代の男の権利主張の典型であったかがよくわかる場面である。しかし、ここで指摘したいのは、オーロラが決して自らの主権を譲ろうとはしないことであり、自らの後ろ暗い過去について全く動じていないことである。

次に見たいのは、同じオーロラへの求婚者であるジョン・メリッシュの場合である。彼はタルボットとは全く異なり、オーロラの秘密に迫ろうとはしない。求婚者であった友人のタルボットが突然オーロラの前から姿を消したことを問いただそうともしない。

> John Mellish could not argue with himself upon his passion, as Talbot Bulstrode had done. He could not separate himself from his love, and reason with the wild madness…. He asked no questions about the past life of the woman he loved. He never sought to know the secret of Talbot's departure from Felden. He saw her, beautiful, fascinating, perfect; and he accepted her as a great and wonderful fact, like the round midsummer moon shining down on the rustic flowerbeds and espaliered garden-walks in the balmy June nights. (*Floyd* 121)

メリッシュのオーロラへの愛は余りに盲目的で、信頼に基づいているとは到底いえないが、下僕のような彼の愛は、タルボットとの別離により傷ついたオーロラを癒していくことになる。

しかしながら、オーロラの最初の夫であるジェイムズ・コニャーズが馬丁として、メリッシュ・パークに雇われることになり、にわかに彼女の周囲は騒がしくなる。それまで、オーロラの美貌と経済力により、抑圧されてきた人々が反撃に転じ始める。彼女の家庭教師であった Mrs Powell が、オーロラとコニャーズとの密会を立ち聞きした後、オーロラは既に私室に戻ったと夫に嘘をつきオーロラを雨の中に閉め出す。ずぶ濡れで屋敷から閉め出されたオーロラ

は夫に怒りをぶつけ、次のように言い放つ。

> ‘I shall want you to take me to London to-morrow, Mr Mellish,’ she said. Then, with one haughty toss of her beautiful head, and one bright flash of her glorious eyes, which seemed to say, ‘Slave, obey and tremble!’ she disappeared, leaving Mr Mellish to follow her, meekly, wonderingly, fearfully; with terrible doubts and anxieties creeping, like venomous living creatures, stealthily into his heart. (*Floyd* 213, emphasis added)

パウエル夫人の情報から、妻に疑惑を抱き始めるメリッシュであるが、オーロラはそのような夫を威嚇し抑圧しようとする場面である。オーロラの過去の秘密については、疑念を封じることができたメリッシュであるが、妻の明らかに疑わしい行動に疑念と不安が生じていく。‘henpecked’、‘petticoat government’ (*Floyd* 142) と表現されてきたこの夫婦にも、夫の側からの不満と疑念が生じ始めている。オーロラの夫に対する高慢な立ち居振る舞いは、前述したタルボットに対した時のマリー・アントワネットと下層階級と同様に、王女と奴隷の関係を示唆している。つまり、オーロラにとり夫婦や男女の関係においても、自らの自由と主権を主張する場面がこの小説には頻出していることを指摘しておきたい。

その最も過激な対立の場面が、コニャーズとオーロラの関係で展開される。この 2 人の間では、メリッシュ・パークでは抑制されているオーロラの激しい性格があらわになっている。

> ‘Yes, hate you[Conyers]!’ she[Aurora] said in a clear voice, which seemed to vibrate sharply in the dusk,— ‘I hate you! hate you! hate you!’ She repeated the hard phrase, as if there were some pleasure and delight in uttering it, which in her ungovernable anger she could not deny herself. (*Floyd* 281)

自分を誘惑し堕ちた女にした男に対峙する場面は、マーガレット・オリファン

トの *Salem Chapel* での、Mrs Hilyard が偽名をかたる Colonel Mildmay に娘は渡さないと感情を爆発させる場面を想起させる。オーロラは Edward Bulwer-Lytton の人気劇である *The Lady of Lyons* に登場する貴族の振りをした庭師に誘惑されたヒロインに言及している（*Floyd* 281）。世間知らずの若い女を欺き誘惑する男というのは、Amatory Fiction 等の18世紀以来の文学伝統のひとつである。

しかしながら、ここで顕著なのは、自らの怒りを爆発させながらも、馬丁として雇われているコニャーズを屋敷から立ち退かせようと交渉を続けるオーロラに、読者が同情するように描かれていることである。

> ‘You’d like to stab me, or shoot me, or strangle me, as I stand here; wouldn’t you now?’ asked the trainer, mockingly.
> ‘Yes,’ cried Aurora, ‘I would!’ She flung her head back with a gesture of disdain as she spoke…. ‘My worst words can inflict no wound upon such a nature as yours. My scorn is no more painful to you than it would be to any of the loathsome creatures that creep about the margin of yonder pool.’ …
> ‘No,’ he said, with a contemptuous laugh; ‘I’m not very thin-skinned; and I’m pretty well used to this sort of thing into the bargain.’ (*Floyd* 283)

この 2 人の会話を暗闇に身を隠し聞いていたオーロラの伯父にあたる Captain Prodder がコニャーズに殴りかかりそうになっていることからも、世知に長けたコニャーズの悪漢振りがわかる。若気の過ちで、色男の誘惑に身を落としたオーロラへの非難よりも、世知に長けたコニャーズへの嫌悪が上回るように 2 人の会話は描かれている。20歳前後のオーロラと30歳を超えたコニャーズの闘いで、いずれが有利であるかは明らかであろう。タルボットやメリッシュとの闘いとは異なり、ここで指摘したいのは、コニャーズと対峙するオーロラの描かれ方である。彼女が過去の罪を懺悔するよりも、誘惑した男の悪行が強調されていることである。

以上見てきたように、オーロラが 3 人の男と自らの秘密を介して対立し争う

時、彼女は決して自らの行動を後悔したりせず、最後まで自己決定権を手放そうとはしていないことを指摘しておきたい。特に、コニャーズとの闘いでは、最初の夫である彼が生きていることが明らかになれば、彼女は重婚罪を問われることになるのだが、夫という立場よりも金が欲しいコニャーズの意図を見抜き、オーロラは交渉を続ける。つまりこのようなオーロラのしたたかさこそ、*Lady Audley's Secret* のヒロイン同様に危険な女という女性像を、彼女が提供することになっていることは肯定されねばならない。

しかしながらその一方で、これらの小説の読者もさらにいえば作者も、オーロラやオードリー卿夫人を批判するというよりも、むしろヒロインに同情あるいは共感したのである。それゆえにこれらの小説が人気小説として爆発的に読まれたのである。批判されるべきは道徳的に逸脱したオーロラやオードリー卿夫人ではなく、むしろそのような状況へと彼女らを追い詰めていった社会や制度ということになる。

このようにオーロラが自らの秘密にも関わらず、自由と自己決定権を主張する姿と、ヴィクトリア朝の性のダブルスタンダードを逆手に取り、伝統的な女らしさの限界を指摘する彼女の造形に、この小説のモダニティを指摘しておきたい。次章では、さらに進んで、女性像のみならず、多面的に『オーロラ・フロイド』のモダニティを、オーロラとの関係に焦点を絞りながら明らかにしていきたい。

III　横断する境界――階級、ジェンダー、人種

煽情小説の典型といってよい、重婚、殺人、脅迫のテーマが、『オーロラ・フロイド』にもある。当然のことながら、これらの事件の中心にはヒロインのオーロラが存在している。オーロラが馬丁のジェイムズ・コニャーズと最初の結婚をしたにも関わらず、ジョン・メリッシュと結婚しているのは重婚になるが、コニャーズが競馬の事故で既に亡くなっていると彼女が信じているとすれば、重婚罪までは問われないことになる。しかし、コニャーズの生死については、新聞記事によるのみで、曖昧な情報に基づいているに過ぎない。自分を誘惑し、欺いたコニャーズは亡くなって欲しいという彼女の望みにより、新しい

結婚へと、新しい人生へと進んでいることになる。この点は、明らかにオーロラが道徳的には非難されるべきである。

しかしながら、過去の秘密を隠蔽して彼女が新しい人生を切り開こうとした正にそのメリッシュ・パークで、彼女の重婚の秘密が暴露されることになる。この秘密の暴露に関与するのが、家庭教師のウォルター・パウエル夫人と、オーロラに鞭打たれた下男のスティーヴ・ハーグレーヴズである。物語前半で、この 2 人は例外的にオーロラに敵意をもつ人物として語られている。つまり、オーロラはこの物語の中で、ほとんど全ての人物から好意を持たれているので、パウエル夫人と、スティーヴは例外的な存在である。パウエル夫人はオーロラの娘時代の家庭教師であり、結婚後も雇われているので、オーロラに感謝し、好意を持って当然だが、むしろ女主人を嫌っており、オーロラもその事実を知っている（*Floyd* 133–34）。スティーヴについては、オーロラの側が彼を恐れ嫌う描写が続く（*Floyd* 135–36）。下男を鞭打つ衝撃的な挿絵の場面として前述したように、スティーヴはオーロラに鞭打たれ、あげくにメリッシュ・パークからも解雇されてしまうので、彼女に復讐を誓うことになる。語り手はこの 2 人の敵について次のように分析している。

> It will be seen, therefore, that Aurora had two enemies, one without and one within her pleasant home: one for ever nursing discontent and hatred within the holy circle of the domestic hearth; the other plotting ruin and vengeance without the walls of the citadel. (*Floyd* 141)

通常であれば、家庭教師のパウエル夫人と馬丁の下男のスティーヴは、職業的にもジェンダーの観点からも、決して協力し合うことなど考えられない。しかしながら、彼らは、メリッシュ・パークに雇われたばかりのコニャーズとオーロラが連絡を取り合っていることに、疑いを持つ。そして、 2 人は馬丁と女主人の密会を隠れて立ち聞きしている時に、鉢合わせることになる（*Floyd* 207–208）。ここで、 2 人は互いの共通の敵がオーロラであり、コニャーズがオーロラに£2,000を要求していることを知る。スティーヴは女主人と馬丁の秘密を探

ろうとし、パウエル夫人は、オーロラの謎の行動をメリッシュに知らせることにより、従順な夫が妻を疑うように促していく。

コニャーズが殺害された後に、メリッシュやタルボットによりオーロラへの疑惑が隠蔽されていく中で、オーロラが殺人を犯したと信じるパウエル夫人は、オーロラが犯人であると告発の手紙を警察に書く。一方スティーヴはパブでオーロラが犯人であると吹聴する。家庭教師と下男という社会階級的には共有するものがない男女が、オーロラへの憎しみと復讐により共闘し、ヒロインの暗部を暴露しようとしていることを指摘しておきたい。

コニャーズの殺害事件を捜査するために、刑事の Joseph Grimstone がメリッシュ・パークを訪れる。スコットランドヤードのグリムストーンが来た理由は、女性が書いたと思われる匿名の手紙である。この手紙の書き手がパウエル夫人であることは明らかであるが、語り手は次のように彼女の行為を分析している、‘The ensign’s widow actually believed in the guilt of her beautiful patroness. It is so easy for an envious woman to believe horrible things of the more prosperous sister whom she hates’ (*Floyd* 413–14)。そうであれば、パウエル夫人は真犯人を知らずに、オーロラへの憎しみと羨望から彼女を陥れようとしていることになる。社会階級を超えて、周縁的な存在である家庭教師と下男の共闘は構築され機能しつつあるが、その共闘にはほころびが生じていることになる。

遂にオーロラは過去の秘密を明らかにし、コニャーズと結婚していたこと、彼と別れてイギリスに戻り、彼が事故で死んだと思いメリッシュと結婚したこと等を夫やタルボットに告白し、コニャーズの殺害に関与していないと身の潔白を述べる。オーロラの無実を信じ彼女を守ろうとするタルボットと、真犯人を見つけるために屋敷内へと侵入し、家庭の秘密を暴こうとする刑事のグリムストーンは、最初は対立関係になる。Heather Milton は ‘Sensation and Detection’ において、刑事がブルジョワ家庭へ侵入していく困難さを次のように分析している。

> While the police detective plays an important role, he is not always the most integral character and is ultimately displaced in the narrative. The class anxiety

> prompted by the intrusion of the police detective into the middle- and upper-class home is alleviated when he is replaced by other characters, usually, though not necessarily always or exclusively, a gentleman detective. (Milton 520)

ブルジョワ家庭内での犯罪は、刑事が能力を発揮できず、紳士探偵、つまり素人探偵がそれに代わるということである。『オードリー卿夫人の秘密』では、正に素人探偵の Robert Audley がオードリー卿夫人の秘密と犯罪を暴いていくことになる。『オーロラ・フロイド』ではタルボットが素人探偵としてコニャーズ殺害事件の犯人を捜していくことになる。この 2 作の違い、あるいはロバートとタルボットの果たす役割の相違は、ヒロインの犯した罪の違いと相関している。最初の夫を井戸に突き落とし、自分を追い詰めるロバートを放火により殺害しようとしたオードリー卿夫人は、若気の過ちで馬丁と身分違いの結婚をし、その夫が事故死したと思い込み再婚したオーロラとでは、犯した罪の重さが異なる。『オードリー卿夫人の秘密』のロバートは、オードリー卿夫人を屋敷から排除し、その存在を完全に消去することで、オードリー邸の平和と秩序を回復する。他方、タルボットはオーロラの無実を信じることで、メリッシュ・パークに名誉を回復させようとしている。ロバートとオードリー卿夫人のような対立は、タルボットとオーロラの間にはない。メリッシュ・パーク内の人間関係と情報を十分に把握したタルボットにとり、刑事のグリムストーンは警戒すべきだが、利用すべき存在である。タルボットとグリムストーンには最初の出会いから、階級的な格差が描かれている。

> The detective—for he had tacitly admitted the fact of his profession—looked doubtfully at Talbot Bulstrode.
>
> ‘You’re a lawyer, I suppose?’ he said.
>
> ‘I am Mr Talbot Bulstrode, member for Penruthy, and the husband of Mrs Mellish’s first cousin.’
>
> The detective bowed.
>
> ‘My name is Joseph Grimstone, of Scotland Yard and Ball’s Pond,’ he said; ‘and I

> certainly see no objection to our working together. If Mr Mellish is prepared to act on the square, I'm prepared to act with him, and to accept any reward his generosity may offer. But if he or any friend of his wants to hoodwink Joseph Grimstone, he'd better think twice about the game before he tries it on; that's all.' (*Floyd* 413)

このようなグリムストーンの敵対的な態度を受け流し、タルボットは彼に夕食後に再訪するように告げる。コニャーズの殺害現場に落ちていた血の付いたボタンが、半年前に庭師がスティーヴに与えたチョッキのものだとわかり、グリムストーンはスティーヴを見張るが、コニャーズから奪った£2,000が見つからなければ彼を逮捕することはできない。

結局、スティーヴを見つけ、血の付いたボタンが彼のチョッキのボタンであることを確認し、£2,000の現金をコニャーズの小屋で見つけ、スティーヴと闘うのはグリムストーンではなく、タルボットである。'gentleman detective' であるタルボットが真犯人を見つけ、それによりオーロラの潔白を証明することに尽力したことになる。ロバート・オードリーのような冷酷さはないが、紳士探偵と犯罪者の関係には、大英帝国と植民地の反乱という対立関係がタルボットとスティーヴの攻防で暗示されている。

> 'You'd better not trifle with me,' cried Mr Bulstrode; 'I've been accustomed to deal with refractory Sepoys in India, and I've had a struggle with a tiger before now. Show me that waistcoat!' (*Floyd* 454)

語り手もタルボットを 'the man who had done battle with bloodthirsty Sikhs' (*Floyd* 454) と表現しているが、重要なのはそのような百戦錬磨の彼が 'the Softy' と呼ばれたスティーヴに組みしかれてしまうことである。力仕事で鍛えた下男の腕力にタルボットは危うく殺されそうになる。植民地の反乱に対する大英帝国のように、タルボットの勝利も脅かされる。社会的地位、階級等を排除した素手の闘いであれば、タルボットに必ずしも勝利はないのである。セポイの反乱へ

の言及は、『オードリー卿夫人の秘密』にもある（*Audley's Secret* 329）。イギリス人にとり、この事件は大英帝国の統治と秩序を動揺させるトラウマとなる事件であった。'the Softy' と呼ばれていたスティーヴは、反抗する植民地の人々が大英帝国を震撼させたように、ブルジョワ家庭を混乱させている。

しかしながら、結末では、オーロラの伯父であるプラダーがタルボットを助け、スティーヴは捕えられ、罪を告白することになる。メリッシュ・パークに再び平穏が訪れ、夫妻には息子が生まれる。つまり、オーロラは危険な女ではなくなり、家庭の天使の役目を引き受けることになる。結婚前にアッシリアの女王と比喩されたオーロラの魔力と好色（*Floyd* 67）は物語結末では管理され、息子を生むことで、メリッシュ・パークに跡継ぎを誕生させている。

結　び

このように、ヒロインのオーロラ・フロイドに焦点を絞り分析を進めてくると、『オーロラ・フロイド』という煽情小説の持つモダニティが様々な側面で明らかになる。そもそもオーロラは、女性らしさを持ちながら、自己決定権を主張する自由な女性である。馬丁のコニャーズに騙されて結婚するが、その過ちを後悔していない。愛するタルボットに対しても、自らの秘密を決して明らかにしようとはしない。彼女は自らの人生の決定権を誰にも譲ることはない。再婚した夫のメリッシュに至っては、彼を萎縮させるほどの怒りを時にオーロラはあらわにしている。このように自らの感情に基づき行動する女としてオーロラは描かれている。伝統的な女らしさや、同時代の理想とされた従順な女性像からは逸脱したオーロラであるが、この小説内では全く罰せられることはない。むしろその結末では、メリッシュ・パークの女主人として、跡継ぎとなる息子を産み幸福な人生を獲得することになる。

ある意味では異端ともいえる女性像であるが、その人生は、力強く、'the girl of the period' と呼ばれる1860年代に登場した、母親世代とは異なる新しい価値観を持つ娘達の生き方にも共通するものである。さらにいえば、1890年代に登場する New Woman Novel の主人公にも通底していくような力強さと新しさを持った女性像となっている。

加えて、女主人のオーロラへの憎しみから、復讐する家庭教師のパウエル夫人と下男のスティーヴの共闘関係は、階級横断的なものであり、社会的地位や面子よりも個人の羨望や憎悪等の感情が優位に立って初めて可能となる共闘関係である。もっとも、この関係は、スティーヴの欲望がコニャーズ殺害へと向かってしまうため、長続きしていない。オーロラを真犯人として告発する家庭教師と、パブで真犯人は屋敷内にいると吹聴する下男の共闘は、使用人の女主人への反乱である。しかしながら、この共闘はブルジョワ家庭の秩序と平安を守ろうとするタルボットを中心とする人々により抑圧されることになる。

そして最後になったが、刑事のブルジョワ家庭への侵犯についてである。最初は自信満々に登場する刑事とそれを軽くあしらう素人探偵の攻防が展開する。前作の『オードリー卿夫人の秘密』では、刑事ではなく素人探偵が全てを取り仕切っていたことに比較すれば、刑事グリムストーンの活躍は、*The Moonstone* 等の刑事が活躍する物語を予感させるものである。

このように、本論ではヒロインのオーロラと、彼女の秘密に深く関与する人物達を詳細に分析することにより、『オーロラ・フロイド』には、ヒロインのオーロラの造形においてのみならず、境界横断的なモダニティの萌芽が複層的に現れていることを明らかにした。

References

Braddon, Mary Elizabeth. *Aurora Floyd*. Ed. P. D. Edwards. Oxford: Oxford UP, 1996.

————. *Lady Audley's Secret*. Ed. David Skilton. Oxford: Oxford UP, 1987.

Edwards, P. D. Introduction. *Aurora Floyd*. By Mary Elizabeth Braddon. Ed. P. D. Edwards. Oxford: Oxford UP, 1996. vii–xxiv.

James, Henry. 'Miss Braddon.' *The Nation*, 9 November (1865). *Aurora Floyd*. Eds. Richard Nemesvari and Lisa Surridge. Broadview: Peterborough, 1998, 592–98.

Milton, Heather. 'Sensation and Detection.' *A Companion to Sensation Fiction*. Ed. Pamela K. Gilbert. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011, 516–27.

Pykett, Lyn. *The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. London: Routledge, 1992.

Oliphant, Margaret. 'Novels.' *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 102 (1867): 257–80.

————. 'Sensation Novels.' *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 91 (1862): 564–84.

Rae, W. F. ‘Sensation Novelist: Miss Braddon.’ *North British Review*, 43 (1865). *Aurora Floyd*. Eds. Richard Nemesvari and Lisa Surridge. Broadview: Peterborough, 1998, 583–92.

Terry, R. C. *Victorian Popular Fiction, 1860–80*. London: Macmillan, 1983.

Tromp, Marlene, Pamela K. Gilbert, and Aeron Haynie, eds. *Beyond Sensation: Mary Elizabeth Braddon in Context*. Albany: SUNY, 2000.

————. *The Private Rod: Marital Violence, Sensation, and the Law in Victorian Britain*. Charlottesville : UP of Virginia, 2000.

Wolff, Robert Lee. *Sensational Victorian: The Life and Fiction of Mary Elizabeth Braddon*. New York: Garland, 1979.